宇宙塵版／

派遣軍還る

光瀬 龍

著者略歴　昭和28年東京教育大学卒，作家　主著書「征東都督府」「たそがれに還る」「無の障壁」「喪われた都市の記録」「消えた神の顔」「アンドロメダ・シティ」（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy

宇宙塵版
派遣軍還る

〈JA133〉

昭和五十六年四月二十日　印刷
昭和五十六年四月三十日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　光瀬龍
発行者　早川清
印刷者　児玉幸男
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号　東京・六－四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・株式会社明光社

ハヤカワ文庫JA
〈JA133〉

宇宙塵版

派遣軍還る

光瀬　龍

早川書房

1247

宇宙塵版／派遣軍還る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

アルテア派遣軍報告第九一七号

アルテア時間二月一二日一九時〇二分。我アルテア派遣軍は第四アルテア凍土地方に侵入を開始した。

アルテア派遣軍報告第一〇二三号

我先頭部隊は敵の最終抵抗線を突破した。

アルテア派遣軍報告第一〇三九号

アルテア時間二月一七日七時二〇分。すべての戦闘は終った。

保安省二月二七日三時五〇分発表

我アルテア派遣軍はアルテア暦二月一二日より二月一七日にかけての第四アルテアに於ける最終的会戦により、アルテア連合軍に決定的打撃を与えて潰滅せしめた。これによってアルテア派遣軍遠征の目的は完全に終った。

保安省三月一日一時二〇分発表

作戦を終了したアルテア派遣軍は第三アルテアに集結を完了。現在、補給休養を受けつつあり、輸送機構の整備をまって各兵団を収容、ただちに帰還の予定である。

宇宙開拓省三月四日二時二〇分発表

アルテア派遣軍の任務達成に伴い、宇宙開拓省は第四アルテア、ラメラ市にアルテア星群域開発局を設けた。同局は派遣軍に代ってアルテア星群域の全経済機構を操作し、調査開発業務を担当する。

――冥王星第二衛星にある酵素原をめぐっての多年の確執が、ついに惑星ダリヤ0（ゼロ）とアルテア星群域との烈しい戦いとなって爆発した。惑星ダリヤ0（ゼロ）の兵団はただちに酵素原に進駐し、ついで四十万の派遣軍を長駆、アルテア星群域に送った。幾多の星々を荒廃と焦土に帰して、烈しい

戦いはようやく第四アルテアの上に移り、戦勢の挽回に最後の望みをかけた決戦にも、アルテア連合軍は各所で分断されついに潰滅した。あとにはただ、茫々とひろがる無人のアルテア星群域だけが残された。

アルテア派遣軍の任務は終った。

時に二四一八年の夏であった。——

1

これまで何度も計画をたててはそのたびに誰かの都合で中止になってしまうピクニックが、今度こそはうまくゆきそうだった。ケイ・リーミンは九日間の休暇許可書を手にすると、まず机の上のテレマークのダイヤルを回した。

「回路青九Bノ〇一一、特急」

パイロットランプの緑色の輝線がまたたいて、テレマークの鏡面に、ぽっと灯が入った。

「回路青九Bノ〇一一デス。ドウゾ」

椅子の肘かけの中の送話器(トーキー)が、ささやくようにリーミンをうながした。鏡面の光点はみるみるうちに拡大してそのむこうにもやもやと映像が現れた。どこかのオフィスの一隅らしい。明るい照明の下で一人の若い娘がいっしんにマイクロフィルムをのぞいていたが、コールサインにふと顔をあげた。白い歯ならびが印象的だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「ああら、リーミン。めずらしいわねえ。こんな時間に」
「あのね、ようやく休暇がとれたのよ。それも九日もよ。ね、ヨーレ、ゆきましょうよ。この間のピクニックの計画……」
「そお、それはよかったわぁ。じゃ、みんなに連絡するわね。みんな喜ぶわよ。集まる場所や時間をきめなくてはね。どうしようかな。……夕方お部屋にいる？　私の方から連絡するわよ」
「そうしてくださる？」
「たのむわ」
「それじゃ、あらためて夕方ね」
「サヨナラ」
　ヨーレは小さく片手を振ると、再びもやもやと消えていった。リーミンはダイヤルを受けにもどすと、机の上に書類をひろげて仕事にとりかかった。こまかい数字のられつの最初の一行を読み終らぬうちに再び、テレマークのコールサインがリーミンを呼んだ。
「回路白三Kノ七一七一デス。サインヲドウゾ」
　リーミンはバリヤーのスイッチを押し、それからOKのサインを送った。十秒以内にサインを送らなければ、受信者不在、或いは受信の意志無しとしてコンタクトが断たれてしまう。
　パイロットランプが点滅し、乳白色の光の縞が、鏡面いっぱいの笑顔になった。
「リーミン、あのね、あの人が帰って来るのよ。ハンイが帰って来るのよ。よかったわぁ。いま

保安省から発表になったのよ。間もなく帰還するんですって。ね、リーミン、うれしいなぁ」
はずんだ声が、ぴんぴんと送話器から踊り出た。
「そう、帰って来るの！　よかったわねえ、チャラ。間もなくっていつ頃なのかしら。くわしいことは言わなかったの？」
「うん。なんにも……でもいいや。すぐらしいのよ」
「ほんとによかったわ。チャラ。おめでとう、何かおごってもらわなければ」
「うん。おごる、おごる。ね、今夜いっしょに御夕食しましょうよ。ヨーレも呼ぶわ」
「ああそうだ。ヨーレっていえば、まだ連絡は聞いてないわね。あなた。ね、こんどピクニックにゆきましょうよ。あたし、休暇がとれたのよ。九日間も。さっきヨーレに連絡したんだけどチャラにも伝えるって言ってたのよ」
「わっ、すごいな。ゆきましょうよ。いつ？」
「ううんまだ決めてないのよ。夕方ヨーレが連絡して来ることになっているんだけど。そうね、それじゃ今夜どこかでみんなで集まりましょうか」
「どこにする？」
「そうねえ……七時にサテン区のソーダー・サルーンにしましょうか？」
「ええ、いいわ。ヨーレにはあたしから連絡するわ」
「それじゃたのむわ」

チャラはリーミンの方へ両手をのばして、もう一回顔じゅうを笑いにすると、残像を残して消えていった。リーミンはほんのしばらくの間、チャラの喜びに思いをはせ、それから彼女の仕事に没頭していった。七時までにはまだ、大分間があった。

リーミンとヨーレ、そしてチャラはともに特修学校で古代史を専攻した仲であった。今ではリーミンは調査局、ヨーレは生産管理局、チャラは第九天文台の、それぞれ枢要な局員であった。三人が二十歳になった年、つまり、今年のはじめ、チャラは以前から親しかったクルド・ハンイと生活省にE登録を申請した。申請は厳重な審査ののちに受諾されて登録ナンバー所持者になった。この惑星ダリヤ0（ゼロ）では、生活省の指示する生活形分類に従って適宜に登録を申請しなければならなかった。チャラとハンイのそれは、二人が、何時でも思う時に居室をひとつにすることが出来る、というE登録形であった。これはテレマークのチャンネルに同じものをもらい、従ってコールサインも同じになるほか、生活の為のあらゆる権利と、最優先の特権が与えられた。リーミンとヨーレは未だに、居住区の高層に居室を与えられているC登録者であった。

だが、チャラとハンイがE登録者として審査にパスした丁度その日に、皮肉にもハンイは、その所属する辺境輸送機構とともに、アルテア派遣軍の補給部隊としてあわただしく去った。

クルド・ハンイは地球の植民地である惑星タムタムCの首都レガピ市にうまれ、その地の大学を出るや、この惑星ダリヤ0（ゼロ）にわたって来て生活カードを提出し、首都オルドウバリク市の市民

となった青年であった。当初より辺境輸送機構に所属し、紫外線と放射能に灼けた顔はいよいよ黒光りをましていた。短くちぢれた褐色の髪と、分厚い唇が、母なる地球を知る者には限りない郷愁を感じさせる、そんな優しい風貌の青年であった。チャラとはどこで出逢ったのか、チャラもハンイも語ったことがないし、リーミン達も別に尋ねたことはなかった。中央計画機構から入学を命じられておもむいた特修学校で初めて三人が知り合い、最初に言葉を交わした時から、チャラには、どこかに、今のハンイの雰囲気がまとわりついていたようにリーミンには思える。まだ充分に稚なさを残しているチャラを、リーミンもヨーレも妹のように可愛がってきたが、それだけに、長途の遠征を終えて無事にもどってくるハンイを待つチャラの気持ちが、痛い程わかるのだ。

七時、サテン区五一七階のソーダー・サルーンの回廊から見おろす首都オルドウバリク市は広大な光の海だった。遙かな直下の灯は或いは動き、或いはまたたき、さざなみのように一瞬たりともとどまらなかった。また遠い灯は、そのひとつひとつもさだかでなく、唯一面に、ぼう、とまばゆい光雲となって市街の果てをかたちづくってみせていた。夜の風はさわやかに、その高層の回廊を吹きわたっていった。

エアロダインを降りたリーミンは、ソーダー・サルーンのエアーカーテンを入った。

「アナタノオ友達ハ二十七番テーブルニイラッシャイマス」

標示器の告げる唄うような声に導かれてゆくと、奥の巨大な鉢植の裸子植物のつるのかげに、チャラとヨーレそれに二人の青年がテーブルを囲んでいるのが見えた。

「あ、リーミン。さきほどはどうも」

「チャラ。よかったわねえ。ハンイが帰ってくるなんて。さっきのあなたの喜びようったら……」

「リーミン。チャラったらハンイのことばかりしゃべってるのよ。さっきから」

「まあ、そうひがみなさんな。ヨーレ」

皆の笑声が周囲のテーブルの人々をふりかえらせた。二人の青年はいずれもヨーレの友人のロケット・パイロットであった。リーミンはこれまで二、三度ヨーレの居室で彼等に会ったことがあった。問われれば彼等は、遠い惑星の都会や植民地の話を言葉少なに語った。

花に集まる蜂のように配膳車がテーブルの間をたくみに縫って走り回る。そして食器を配り料理を取り分けグラスに注ぐ。これは店の奥にある電子頭脳によって操作されるロボットである。今日のこんだては、D八二B、すなわち、合成脂肪八、合成蛋白質二を植物性香料で加工した湿性食である。今から四、五百年前までの人類はまだ一日三食であったが、その頃のカロリー量のほぼ六倍のものを、リーミン達は一日一食乃至二食の食事で摂取していた。飲料に混入されたビタミンや、稀少元素や、種々のワクチンまでが、にぎやかな食事の中で絶えず補給されていた。

「ね、古代公園へピクニックにゆかない？」

眼を輝かしてチャラが言った。
「そうね、古代公園っていいわねえ。あたし大分前に湖へ行ったことがあるわ」
「ねえ。あたしもさんせいよ。あなたがたもよかったらいらっしゃいません？」
「それは是非連れていって戴きたいですね。僕はまだ行ったことがないんですよ。何しろ帰って来れば、病院へ入れられてしまうし、出てくれば、またすぐ出航でしょう。此の市内さえろくに歩いたことが無いんですよ。全くロケット・パイロットになんてなるものじゃない。おい、お前も行くだろう」
「ああ、何とか都合をつけて行きましょう」
「まあ嬉しい。みなさんいらっしゃるのね」
「いつにする？」
「あしたでもあさってでもいいわ」
「あたし、あさってがいいわ」
「それじゃ、リーミンの希望をいれてあさってにしましょうか？　みなさんいかが？」
「よろしい」
「結構ですよ」
「じゃ、何時、何処へ集まる？」
「……ポイントD八でどうかしら？　八時に」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo